

井上靖「北の海」 金沢市広坂（ほくりく文学散歩） / 富山

井上靖の「北の海」は一九六八年十二月、新聞連載小説として発表された。「しろばんば」「夏草冬涛（ふゆなみ）」に続く自伝三部作の三作目とされる。

舞台の旧制第四高等学校は、本館が金沢市広坂二丁目に石川近代文学館として残る。国の重要文化財である同館は石川にゆかりのある作家らの資料の展示室や、四高記念室があり、年間三万数千人が訪れる。

主人公の伊上洪作は、静岡県の沼津中学を卒業し、浪人生活を送りながら母校の柔道場に顔を出していた。ある日、金沢の四高柔道部員の蓮実が沼津中の道場を訪れる。蓮実は洪作の実力を見込み、四高で柔道をしないかと誘う。

練習量がすべてを決定する柔道。

この言葉を思い出すと、洪作は身内が痺（しび）れるような気がした。どうしてただこれだけの言葉にこんな魅力がはいっているのでしょうか。

七月、洪作は金沢へ行き、四高柔道部の夏季練習に参加する。勝つための柔道とは、寝技専門のけいこをすることだった。

その時気付いたのだが、蓮実の右の耳は大きくはれ上っていた。前に沼津で変形しかかっている蓮実の耳を見たが、今はそんなものではなかった。人間の耳がこんなにはれ上るものかと思うほど大きくはれ上っている。

洪作は金沢で十数日を過ごし、四高の柔道部に入る決意を強め、沼津へ帰る。

三〇年に旧制四高を卒業した奈良市法蓮北町、足立浩さん（九〇）は柔道部で井上靖と同期だった。足立さんによると、井上は小柄だったが、立ち技、寝技とも強く、背負い投げと崩れ上四方固めが得意だったという。

「練習はほとんど寝技でした。耳がつぶれ、寮に帰って水で冷やしたものです。井上も耳がつぶれていましたが、なぜか冷やしませんでした」

四高柔道部のモットー「練習量がすべてを決定する柔道」について足立さんは「ともかく柔道一筋。酒もたばこも控え、がむしゃらに練習、練習です」と話す。だが、井上や足立さんらは柔道漬けの学生生活に疑問を抱いた。

「一年生が入ってこないし、辞めていく部員もいる。知人からは『柔道しに四高へ来たんか』と言われた。二年の終わりに、三時間ほどだった練習時間を二時間以下にしようと唱えたのです。それがOBらの意見と合わず、三年の初めに井上と一緒に同級生六、七人で退部し、ほかの学校の道場に出かけてけいこを続けました」

井上は父が軍医で、医者になるつもりで入学したが、苦手な科目が多かった。そのうち医者になりたくなかったが、親が認めず、井上は悩んでいたという。

「三年のとき、井上が『医者にならなくてもよくなった』と喜んでいました。耳がつぶれているから医者になっても聴診器が入らない、と親に言つと、しぶしぶ許してもらったそうです。井上が亡くなったとき、彼の耳を見て、そのことを思い出しました」と、足立さんは語る。

石川近代文学館の展示室8には、四高柔道部時代の井上の写真や、井上が着た四高の校章入りの柔道着がある。

（渡部耕平）

\*

<井上靖> 一九〇七年、北海道生まれ。沼津中（静岡県）、旧制四高理科（金沢市）、京都帝大哲学科を経て、毎日新聞社入社。美術記者などを勤める。五〇年に「闘牛」で芥川賞を受賞。七六年文化勲章受章。代表作に「敦煌」「天平の薨（いらか）」「孔子」など。九一年一月死去。